

# 無限次元ガウスの消去法を用いた radii-polynomial approach の改良

関根研究室 2131701 齋藤 悠希

# はじめに

微分方程式を計算機で解くとき、  
計算機の資源が有限という特徴のために  
方程式の解に誤差が発生する。

→ 解の誤差を評価し、精度を保証する。

精度保証付き数値計算

# 背景 - van der Pol 方程式

## van der Pol 方程式

$$\frac{d^2 x}{dt^2} - \mu(1 - x^2) + x = 0$$

- 未知関数 :  $x(t)$
- パラメータ :  $\mu > 0$

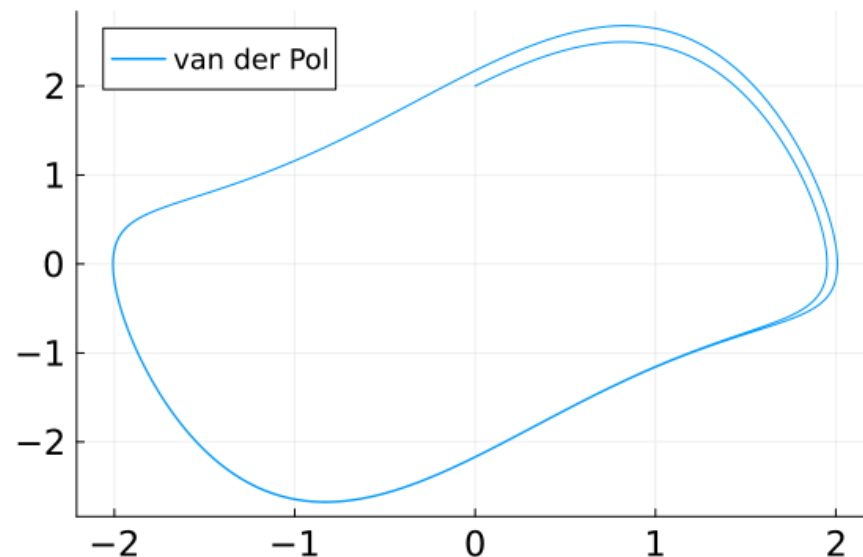


図 1: van der Pol 方程式  
初期値  $(0, 2)$ ,  $\mu = 1.0$

# 背景 - 先行研究

## radii-polynomial approach [1]

$X, Y$	Banach 空間
$\mathcal{L}(X, Y)$	$X \rightarrow Y$ への 有界線形作用素の集合
$A^\dagger$	$\mathcal{L}(X, Y)$ の要素
$A$	$\mathcal{L}(Y, X)$ の要素
$F$	$C^1$ -Fréchet 微分 可能な作用素

$$\|AF(\bar{x})\|_X \leq Y_0$$

$$\|I - AA^\dagger\|_{\mathcal{L}(X)} \leq Z_0$$

$$\|A(DF(\bar{x}) - A^\dagger)\|_{\mathcal{L}(X)} \leq Z_1$$

$$\|A(DF(b) - DF(\bar{x}))\|_{\mathcal{L}(X)} \leq Z_2(r),$$
$$\forall b \in \overline{B(\tilde{x}, r)}$$

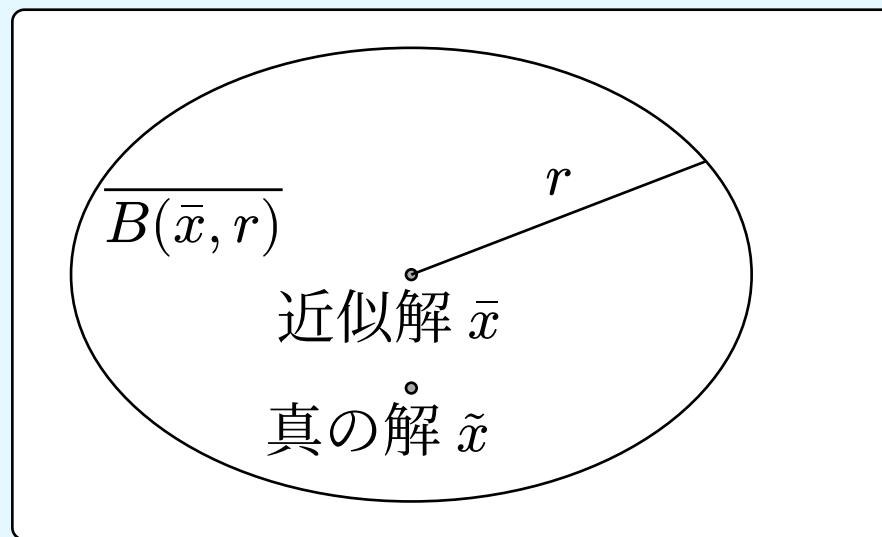
# 背景 - 先行研究

## radii-polynomial approach [1] (続き)

radii polynomial を以下で定義する.

$$p(r) := Z_2(r)r^2 - (1 - Z_1 - Z_0)r + Y_0$$

$r_0 > 0$  かつ  $p(r_0) < 0$  なら,  
 $F(\tilde{x}) = 0$  となる解  $\tilde{x}$  が  
 $\overline{B(\bar{x}, r)}$  内に一意に存在する.



参考: [1]高安亮紀, Julia 言語を使った精度保証付き数値計算のチュートリアル

# 背景 - 先行研究

西窪の研究[2]では, radii-polynomial approach において作用素  $A$  を,  
「 $A^\dagger$ の近似逆作用素  $\rightarrow$  真の逆作用素」とおき,

$$A \approx DF(x)^{-1} \rightarrow A = DF(x)^{-1}$$

$$AA^\dagger \approx I \rightarrow AA^\dagger = I$$

ノルムの計算を簡略化.

$$\text{例) } \|A(DF(\bar{x}) - A^\dagger)\| \leq Z_1 \Rightarrow \|ADF(\bar{x}) - I\| \leq Z_1$$

$\rightarrow$  精度は大きく低下しない, 計算時間は短縮

参考: [2]西窪壱華, radii-polynomial approach における零点探索手順の削除

# 既存手法と問題点

ノルムの計算に、重み付き  $l^1$  ノルムを定義.

重み付き  $l^1$  ノルム (既存手法)

$$\|a\|_{\omega} := \sum_{k \in \mathbb{Z}} |a_k| \omega_k < \infty$$

$l^1$  ノルム ( $l^1$  空間)

$$\|a\| := \sum_{k \in \mathbb{Z}} |a_k| < \infty$$

重み付き  $l^1$  ノルムでは、 $\omega_k$ があるため、 $a$ の条件が厳しくなる.

→ 精度保証できる条件が限られる.

→  $l_1$ 空間を使うことで、条件を緩和できる.

# 目的

重みを外した  $l_1$  空間上で計算することで,

radii-polynomial approach の適用できる問題の範囲を大きくする



# 提案手法 - 概要

精度保証するために,  $\|DF(\bar{x})F(\tilde{x})\|$ を計算しなければならない.



$l^1$ 空間上で,  $DF(\bar{x})$ は全単射でなければならない.



無限次元ガウスの消去法[3]を用いて,  $DF(\bar{x})$ が全単射であるか確かめる.

参考 : [3]Kouta Sekine, Mitsuhiro T. Nakao, and Shin'ichi Oishi:, “Numerical verification methods for a system of elliptic PDEs, and their software library”

# 提案手法 - 無限次元ガウスの消去法

$\phi := DF(\bar{x})^{-1}F(\tilde{x})$ とおくと,

$$DF(\bar{x})\phi = F(\tilde{x})$$

両辺に作用素  $A$  を掛け,

$$ADF(\bar{x})\phi = AF(\tilde{x})$$

# 提案手法 - 無限次元ガウスの消去法

射影演算子 $\Pi_N$ より、以下の作用素を定義する.

$$\begin{aligned} T &:= \Pi_N ADF(\bar{x})|_{X_1} : X_1 \rightarrow X_1, & B &:= \Pi_N ADF(\bar{x})|_{X_2} : X_2 \rightarrow X_1, \\ C &:= (I - \Pi_N) ADF(\bar{x})|_{X_1} : X_1 \rightarrow X_2, & E &:= (I - \Pi_N) ADF(\bar{x})|_{X_2} : X_2 \rightarrow X_2 \end{aligned}$$

$DF(\bar{x})\phi = F(\tilde{x})$ は、作用素の定義より、以下に変形できる.

$$\begin{pmatrix} T & B \\ C & E \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \Pi_N \phi \\ (I - \Pi_N)\phi \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \Pi_N AF(\tilde{x}) \\ (I - \Pi_N)AF(\tilde{x}) \end{pmatrix}$$

# 提案手法 - 無限次元ガウスの消去法

$S$  を以下のように定義し,  $A$  と  $DF(\bar{x})$  から求められる.

$$\begin{aligned} S &:= E - CT^{-1}B \\ &= (I - \Pi_N)ADF(\bar{x}) - ((I - \Pi_N)ADF(\bar{x}))(\Pi_N ADF(\bar{x}))^{-1}(\Pi_N ADF(\bar{x})) \end{aligned}$$

$$\|I_{X_2} - S\| < 1$$

となれば,  $S$  は全単射となる.

$T^{-1}$ が存在することを確認し,  
 $S$  が全単射であれば,  $DF(\bar{x})$  が全単射となる

# 実行環境

表 1: 実験環境

環境	詳細
CPU	12th Gen Intel(R) Core(TM) i7-12700
OS	Ubuntu 24.04.1 LTS
コンパイラ	Julia 1.11.2
微分方程式解答ライブラリ	DifferentialEquations v7.10.0
数値計算ライブラリ	IntervalArithmetic v0.20.9

# 実験結果

表 2: フーリエ係数の次数の変更による  $\|I_{X_2} - S\|$  の比較

次数	$\ I_{X_2} - S\ $
50	0.22815114629236252
100	0.11455533660051737
150	0.07655718822651922
200	0.05749210273025131

- すべての次数条件において,  $\|I_{X_2} - S\| < 1$  を満たした.
- 次数が上がるにつれ, ノルム値が減少.

# まとめ

- 無限次元ガウスの消去法を用いた radii-polynomial approach の改良方法を提案した
- 数値実験での検証により,  $l_1$ 空間上で  $DF(\bar{x})$  が全単射であることがわかった

→ 提案方法で改良可能であることがわかった